

満州の思い出

山形県 東海林 照代

女子勤労報国隊員として渡満したのは戦況も押し迫った昭和二十年四月二十一日、新潟から船で羅津港に上陸、目的地の協和開拓団に着いたのは五月五日、私達はここで故郷のことを内地と呼んだ。

内地と違い満州は広い。アメリカの飛行機も飛んでこない。戦争に関係ない国に来たように思う。故郷を遠く離れて、ふと淋しくなる乙女の心を慰めてくれた。たんぼぼ、すみれ、母子草、内地からの便りを何よりの楽しみにして働いたのも三か月余り。忘れられない八月十五日、終戦はあまりにも早くやって来た。そして世の中は一変した。

昼夜の別なく突然やって来るソ連軍。捕まったら大変と、そのたびに息を殺して隠れた草原、ピューピューと頭上をかすめる弾丸、夜空の星を眺めながら野宿の連

続、そんな時には、故郷恋しさに流す涙が冷たくなって、万一のときにといつも持っている青酸カリを握り締めた。

運悪く銃弾に当たって倒れた人、病気で倒れる友、顔をきれいに洗っただけでも、ソ連兵に連れて行かれてもよいのかと大声で怒鳴られたりしたものである。

故郷に帰るあてもなく、毎日のように逃げ回り、食べ物に粟、高粱、すいとん、南瓜の茎など何でも食べられるものを探して食べたが、団員の方々の暖かい励ましによって私達も少しずつ明るく元気になって戦後の混乱の中で一年を過ごした。それだけに引き揚げの指令を聞いたときは嬉しかった。生きていてよかったと手を取り合って泣いた。

命がけの一年間、もう二度と訪れることもないだろう協和の村に別れを告げた八月下旬、健康に感謝しながら歩いた道程四十里、屋根もない汽車に乗せられ、入浴など二か月目に一回ぐらいあったろうか。晩秋の寒さ身にしむ十一月八日、山形県楯岡駅に着いた。

私の余りにも哀れな姿。あれから四十五年。

今、子供達に、日本では何人ぐらい戦争のために死んだと思うかと聴いても全然わからない。まして日本の軍人の戦死以外の、満州にいた、日本人の地方社会人の支社の数と、日本人の資産の全部が喪失した損害など考えもつかないだろう。

二度と戦争を繰り返さないように、戦争の悲惨と如何に無駄であるかを後世に伝える責任を切に思うことしきりである。

拓友と妻の霊位にささぐ

山形県 佐藤 貞彦

昭和十六年四月拓務省の青少年義勇軍の教師、幹部として内原訓練所第十六中隊に奉職、日本国の生命線満州国の五族協和、北辺の鎮護、食糧増産の国策に感動して渡満しました。十六中隊の名称が太田中隊と改称された。十七年に結婚、十八年長男誕生。

昭和十九年五月宝清縣に太田中隊が第四次羽陽義勇隊

開拓団と改称され入植移行し、妻子を団に残して七月十日関東軍に応召、吉林省双河縣で終戦、ソ連兵に捕えられ、シベリヤで労役、二十一年四月釈放された。十日後ハルビンにたどり着き、日本人会で羽陽義勇隊開拓団は阿城に居ると知った。二百三十人の団員は根こそぎ召集、団員と花嫁約五十人と太田団長一人が閉団し避難していた。妻は子供を連れ避難中、団員と離れ、関東軍の将校斥候下に加わり、妻は子供を抱きながら小銃で交戦、負傷した。二十一年五月ハルビン日本人会を通じて妻子と再開、労をねぎらった。ほどなく愛生孤児園で長男栄養失調で死亡、遺髪をうけた。七月に妻は将校斥候に再度加わり銃で交戦し負傷が原因で戦死した。我々は二十一年七月阿城難民收容所に日本人会の案内で着く。団員は僅か十人と再会、同年九月十八日実家である山戸村に引揚げる。

拓友と妻子の霊を照霊するにはどうすれば良いか熟慮した結果、農業学校や農業指導で学んだ造林で、山林の公益機能たる大気の浄化、酸素の供給、水資源の涵養、国土の保全等の公益機能が昇天の霊界も世界各国がいと